

平成26年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	新課程対応の世界史B教科書の批判的検討
------	---------------------

研究代表者

氏名 田中比呂志	所属 歴史学分野	職名 教授
-------------	-------------	----------

研究分担者

氏名 栗田伸子	所属 歴史学分野	職名 教授
川手圭一	歴史学分野	教授
小嶋茂稔	歴史学分野	准教授

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

本研究の目的は、「高等学校学習指導要領」の改訂にともない、それらに対応した世界史B教科書(全7種類)が検定を経て刊行されるに至ったことから、新しい教科書を研究し、教科書の変化を確認し、講義、入試の出題等に十分な準備をすることにある。メンバーがそれぞれ、西洋前近代史領域(栗田)、西洋近現代領域(川手)、東洋前近代領域(小嶋)、東洋近現代領域(田中)を分担して担当し、検討をすすめた。

まず、各教科書が高等学校でどれくらい採用されているかを把握すべく調査した。これはやはり有史に直結する問題であるからである。その採択率は、最大シェアのもので約50パーセント(仮にこれをAとする)、最小シェアのもので約2パーセントと、大変大きな開きがある。教科書Aは、前回の版で30パーセント台であったことから、そのシェアを大きく回復したことになる。同じく新課程対応の世界史A教科書(全9種)では、最大シェアのものが25パーセント程度を占め、数種類が10パーセント台を占めて、それに続くという状況からすると、世界史B教科書の採択の偏りが顕著である。

内容的には近年来の歴史学研究の進展を受けて、その成果が徐々に教科書に反映されてきている状況が伺える。だが、その速度にはばらつきがあり、なおまだ反映されていない教科書も見られる。それ故、記述(因果関係の説明の仕方など)が割れているものや、記述の仕方にも隔たりがあるものも見られ、入試における出題の仕方に一定の注意が必要な領域があることもわかった。また、全体のページ数はほとんど変わらないが、近現代領域が大幅に増加している教科書も見られた。

近年の教科書のボリュームや、登場する単語数が、以前の教科書と比べて、大幅に増加している状況が指摘されている。世界史全体の流れを考慮すると、必ずしも必要性の高くないものも混在することも事実である。引き続き、今後の動向に留意していく必要がある。

研究成果発表方法

[発表論文名(口頭発表を含む)、氏名、学会誌等名(投稿中・投稿予定・執筆中)を記入する。]

※本経費を用いて、報告書(冊子等)を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

なお、研究内容が入試等に関係しているため、成果に関しては適切な時期に紀要等に発表したと考えている。